

## ロシアの村の教会で

牛島 義友

私はこの六月、二週間位ソ連を訪問する事ができた。その中の二、三の風景を書く。キエフから飛行機で一時間五十分位でミネラルヌイエという空港についた。これはミネラルウォーターの意味である。ウクライナから黒海までずっと平原がつづき、ここからコーカサス山脈がはじまるが、この前山は火山性で一千から一千数百メートルの山々が点在し、この山麓から鉱泉が湧く。これが病に効くというので革命前から保養地であったが、今日多くのサナトリウムが設立されている。ここに四泊して農村の教会に案内された。最初に行った教会はコサツクの部落にある木造の教会で百五十年位経っており、農民らの移住にしたがって移築されたそうである。一行がバスを降り教会の門を入ろうとするや、教

会の長老と思われる老人が非常に大きく丸いパンを両手で捧げ持っておられ、そのパンの上にある塩を来訪者の代表がパンの上にもふりかける。このパンは心からの歓迎のしるしである。堂の中には大勢の信徒、婦人達が集まり、われわれに一人ずつバラの花を渡される。礼拝の日でもないのにわざわざ集まって下さったらしく、親切でこっちの挨拶の話も喜んで聞いて下さった。言葉は通じなくともその態度により、純朴なホスピタリティとその背後の敬虔な信仰がうかがわれた。この村には神父さんは一人である。ロシアの農家はせいぜい、十六坪位のもので、庭もせまく、垣なども粗末で豊かとは思えない。この老人達は激しい労働の中で信仰を保ちつづけておるようである。

その次の日訪れた教会は一度飛行場まで戻り、さらに十数キロ行った所にある教会で、自動車が高速で走る公道を離れ、村道に入ると、前日の雨でできた水たまりの中には沢山のおひるが遊んでいて、それを追いながら徐行して進行した。一寸行った村の外れに教会がある。まず前述の丸パンの歓迎を受け、やはり心からの歓迎を受け、言葉は通じなくとも強く握手される。ここでは老神父が司教されているが、鐘つきなど手伝っている青年がルパンカを着ているのが珍しい。ルパンカは街では着ている人なく、店にも見当らず、ここではじめて見たのである。また教会の中に可愛い、十歳以下の娘さんが二人、目についてきた。神父さんのお孫さんで、あとで神父さんの家で昼食を頂いた時も一しょについてきて室の隅におられた。一行の中の婦人が折紙で鶴を折ってあげたら一心に見ていたが、われわれが食事中、床に坐って折紙を始めた。非常に正確に器用な折り方でチュールリップの花

を作り、客の全員にあげたいと思つてか、熱心に折りつづけ、沢山のチュールリップができた。この手つき、動作は日本の子供よりも器用で賢そうであり、人を喜ばそうとの好意にあふれていた。

先ほどの丸パンも割って食卓に供されたがフンワリとやわらかく、美味しく、他の御馳走が沢山で、今は食べ切れないけど折角だから頂いて帰ると持ちかえられた婦人もあった。

#### ある神父さんのお家の招待

この家は平家建てで、門を入れて玄関のそばの客間は、細長い八畳位で全員が席につくともう余裕もない位だが、食卓にはきれいなクロスの上に沢山の料理が一ぱい並べられた。神父さんは自分はコーカサス人だからコーカサス式でやると、まず直径三十糎位の丸いパンをうすく焼いたものを三段重ねた、風変りなパンに自からナイフを入られた。前菜には野菜や果物が多く、トマト、キュウリの他に、オリーブとか、ナスに野菜を詰めて焼いたものなど、またチーズ、サーモンもあり、ミネラルウォーター、ジュースの他に、ウオッカ、コニャックなど飲物もいろいろである。スープも野菜のと肉のと好きな方とされるが、それぞれ満腹。つづいて肉の揚げ物の大皿、魚の皿などもう手を出す者もない。最後には大変大きなケーキがデザートとして供され、奥さんがまずナイフで中央に丸く切り目を入れてから、外側を放射状に切り分けられた。大変美味しいのだが、ほんの少ししか頂けない位であった。これだけの料理を作り、ケーキまで焼くのが、皆、奥さんとその

妹さん、お手伝いによる手作りなのであるが、その腕前も大したものであった。ロシアの主婦たちのドメステイックな才能には敬服した。また神父さんと奥さん、妹さん、坊ちゃんとで合唱して下さったが、誠に見事なもので、特に妹さんのソプラノは立派で、神父さんはバス。もっともこの妹さんはプロの歌手を志しておられる由で、また奥さんもクロイアーを坊ちゃん方と一しょに助けておられるそうである。家庭でこのような教養の深さと、暖かい雰囲気は驚きであった。この中で子供の教育に努力されておる訳である。他でも父上も神父というある神父の御子息が二人共、今神学を勉強中というお宅もあり、ロシア正教の伝統がこのようにして保ちつづけておる面を知った。

(元九州大学教授)

